

3 研究内容（別紙）

研究課題名：第3回ケミカルハザードシンポジウム～学際研究活性化のための産学官連携を目指して～

共同研究者名：石塚真由美（北海道大学大学院獣医学研究院）、中山翔太（北海道大学大学院獣医学研究院）、水川葉月（愛媛大学農学部）

概要・目的：

環境科学分野は、この20年間で特に発展してきた領域であり、様々な学問・技術が関与する正に学際領域である。その目的は、全ての人類が持続可能に生活するための環境基盤を提案し、将来に向けたモデルを構築していく事であろう。急激に増加する人口、それを支えるための農業活動や産業活動、それに伴う生態系や地球環境の変化を適切に予測し、対処しなければ、我々人類の持続可能な生活は成り立たない。刻一刻と変化していく地球環境の変化をモニタリングにより適切に把握し、問題点を整理し、その対策を講じることは重要であり、学際的な議論の場が必要である。これが、申請者らが企画する当該シンポジウムの基本理念である。

当該シンポジウムの前身は、愛媛大学と北海道大学を中心に実施していた合同セミナーであったが、2017年度にはケミカルハザードシンポジウムと名称を変更し、6大学（愛媛大、北大、京大、千葉大、帯広畜産大、酪農学園大）での国際シンポジウムとして展開してきた。分析化学、毒性学、生態学、環境工学、統計学等、様々な分野の若手研究者を招聘し、活発な議論を実施してきた。一方、これまでのシンポジウムでは大学が中心であったが、今回はよりすそ野を広げ、環境科学に関連する企業や地方環境研究所に所属する研究者も招聘し、より学際的な議論の場を設ける予定である。本シンポジウムはこれまで開催してきたノウハウや実績を持つ北海道大学で開催し、これまで参加してきた6大学に加え、北海道・東北地域を中心とした大学や企業、地方環境研究所からの参加も募る。

開催の詳細：

開催場所：北海道大学大学院獣医学研究院 講堂

開催時期：2019年10月29日～30日

報告：

Chemical Hazard Symposiumの前身は、愛媛大学と北海道大学を中心に実施していた合同セミナーでしたが、2017年度に名称を変更し、6大学（愛媛大、北大、京大、千葉大、帯広畜産大、酪農学園大）での国際シンポジウムとして展開してきました。分析化学、毒性学、生態学、環境工学、統計学等、様々な分野の若手研究者を招聘し、活発な議論を実施してきました。さて、本シンポジウムですが、ご参加頂きました人数および組織数もこれまでで最大となり、大学関係として北海道地区からは北海道大学と帯広畜産大学、酪農学園大学が、東北地区からは東北大学が、他地域からは千葉大学、京都大学、愛媛大学、熊本県立大学にご参加頂きました。企業からは、アジレントテクノロジー、いであ、Sciex、ジーエルサイエンス、島津製作所、JESCO、三浦工業、東北緑化、猛禽類医学研究所に、また国立環境研究所や北海道・東北地区の地方環境研究所の方々にも多数ご参加頂きました。さて、様々なシンポジウムや学会が専門性を高めていく中、本地区部会は“環境”をキーワードに広範囲の分野・視点からの発表となりました。プログラムの一部は別添に示した通りで、5つの特別講演や企業講演を含む合計28演題を企画し、北海道東北地域で生じている問題を中心に情報を共有しながら、議論を行いました。初日は特別講演、Keynote lecture、学生セッションおよび企業セッションを実施し、また台湾からEn-Cheng Yang先生をお招きしたこともあり言語は基本英語と致しました。Keynote lectureには、環境化学会新会長の鈴木規之先生にお越しいただき、今後の環境化学で何を考えていかなければならないのか、先生のご意見を頂きました。2日目には3つの特別講演を企画し、学術専門学会ではなかなか聞くことが出来ない、ユニークな3つの発表を東北大学仲井邦彦教授、猛禽類医学研究所小笠原浩平先生、JESCO 松本修所長に実施していただきました。また、一般セッションおよび企業セッションも各分野に

おけるホットトピックスをご講演頂きました。特に企業の方々には、製品紹介にほとんど時間を割くことなく、本当に貴重なデータを惜しみなく出していただきました。最後になりますが、3回目の Chemical Hazard Symposium を無事に終えることが出来ました。産学官連携を目標に本シンポジウムを開催したわけですが、今後につながるネットワークを気づけたのでは無いかと感じます。ただ、何事も継続が大切であり、その意味でも本シンポジウムを続けていくこともまた重要なのでは無いかと改めて感じております。